近畿・中国両方言境界地帯における否定、不可能表現

鎌田良二

近畿地方・中国地方の境界は行政区分では、兵庫県赤穂市・赤穂郡・佐用郡・宍粟郡・美方郡と、岡山県和気郡・英田郡・勝田郡、鳥取県八頭郡・岩美郡とが接するところである。

兵庫県西部と、鳥取・岡山両県の東部とが接するところである。

ところが、近畿方言と、中国方言との境界は、アクセントについて言えば、兵庫県の北部にあたる但馬地方は中国地方のアクセント圏に入り、兵庫県西南部の赤穂郡・佐用郡も準京阪式アクセントということになっているが、岡山アクセントと兵庫県内一般のアクセントとの境は、赤穂・佐用両郡内を通っているようである。(註1)

要するに、近畿・中国両アクセントの境界線は、赤穂郡内のやや西寄りの地域から北上し、佐用郡中央部から宍粟郡の北部を通り、但馬と播磨との境、即ち、養父郡の南から朝来郡の中央部を通り、更に京都府天田郡から若狭湾にぬける線である。(註2)

音韻地図もちょうどこれと同じ線を通ってその境界を示している。(註3)

それでは語法の面ではどうか。

アクセント・音韻の線とほぼ一致するものかどうか、興味ある問題である。

ここでまず、語法では一般にどういうことを問題としてとりあげるか、又、語法で、境界線というものを引くためには特にどういうことをとりあげればよいのか。更に、近畿・中国のこの地域での語法では何を問題とするか。

方言の一般語法、境界線のための語法、近畿・中国の語法という三つの点から考えなければならない。

例えば、境界線を引くための語法の場合、一見それは両地方における明らかな対立のように見える言い方であっても、それは単なる音韻上の変化ではないのか、音韻の問題ではないのか、本当に語法として問題にするものかどうかを明らかにしておかねばならない。

私は、この数年間に次にあげる三十地点にそれぞれ三回乃至五回おとずれて調査したのであるが、文法上のいろいろの問題を今後、機会があるごとに述べてみたいと思う。

今回は、まず、否定・不可能表現をとりあげてみる。勿論、この否定・不可能表現だけで、近畿・中国両方言語法の境界線を引こうなどと思っているのではない。私がこの地方の語法を調べている目的が先に述べたような点にある、ということであって、今回は、その調査結果の一部として否定・不可能表現を記したまでである。

語法の面で完全な調査をするためには、やはりその土地に暫くでも住みついて、自然の会話からぬき出さなければならない。大人と子供とでは相当の違いもあるし、実際の調査にあたってみると、Aの形とBの形とは同じ位に使う、Cもたまには使う、Dも異様には感じない、Eは少なくともこの土地のことばという感じはしない。又、同じ地点で別の人に聞けば、Aを最も普通に使い、Bも使う、Cもたまには使う。という。という場合、どこまでをこの地点の語法として採るかということで迷うことがある。

そこで、この否定・不可能表現の場合は、次にあげるように、それぞれの地点の中学校で、中学三年生又は二年生を対象に男・女十名ずつ集まって、互に話し合ってもらい、これとこれとがこの地点の普通の言い方だろうというものをとりあげ、また、中学生は使わないが一般に大人は使っているというものも入れた。

調査地点は（図）に示す通りである。（図）に記した①～㉚は次の地点である。

① 兵庫県佐用郡佐用町（佐用中学校）
② 〃 〃 上月町（上月中学校）
③ 岡山県英田郡美作町林野（林野中学校）
④ 〃 津山市（津山東中学校）
⑤ 鳥取県八頭郡智頭町（智頭中学校）
⑥ 〃 〃 郡家町中私都（ナカキサイチ）
⑦ 鳥取県鳥取市（鳥取北中学校）
⑧ 兵庫県宍粟（シソウ）郡山崎町（山崎中学校）
⑨ 〃 〃 波賀町安賀（波賀中学校）
⑩ 〃 〃 〃 引原（波賀中学校引原分校）
⑪ 〃 〃 〃 道谷（波賀中学道谷地区生徒）
⑫ 鳥取県八頭郡若桜町（若桜中学校）
⑬ 兵庫県朝来郡生野町（生野中学校）
⑭ 〃 〃 竹田町（竹田中学校）
⑮ 〃 養父郡養父町（養父中学校）
⑯ 〃 〃 八鹿町（八鹿中学校）
⑰ 〃 出石郡出石町（出石中学校）
⑱ 〃 豊岡市（豊岡南中学校）
⑲ 〃 城崎郡竹野町（竹野中学校）
⑳ 〃 赤穂市（赤穂東中学校）
㉑ 岡山県和気郡日生町（日生（ヒナセ）中学校）
㉒ 兵庫県洲本市由良（由良中学校）
㉓ 〃 三原郡南淡町福良（福良中学校）
㉔ 〃 津名郡五色町（五色ヶ丘中学校）
㉕ 〃 三原郡三原町（三原中学校）
㉖ 〃 津名郡一宮町（一宮中学校）
㉗ 〃 〃 北淡町（北淡東中学校）
㉘ 〃 〃 東浦町久留麻（仮屋中学校）
㉙ 兵庫県洲本市安平（安平中学校）
㉚ 〃 津名郡東浦町釜口（釜口中学校）

否定の形は、いわゆる未然形に否定辞「ない」がつくのが共通語の形であるが、この地方の否定辞は殆ど「ヘン」又は「ン」である。その「ヘン」が「ヒン」となることがある。例えば、赤穂市内では、（見）ミーヒン、（着）キーヒン、（落）オチーヒンとなる。しかし、「行く」「受ける」などには「ヒン」はつかない。即ち、動詞語尾がイ段になる場合に限って「ヒン」となり、ア段、エ段などの場合は「ヘン」である。この場合—ｉｈｉ—となることは音韻現象とみることができよう。

だから、否定辞それ自身の形よりも、否定辞と、動詞との接続のしかた、例えば、動詞「行く」と「ヘン」との間に何か他の語を挿入するとか、動詞のア段の音から続くか、エ段の音から続くかというようなことを問題としてとりあげることにする。

不可能の場合も同様であるが、可能動詞をつかうかどうかということは、語彙の問題になるかと思うが、ここでは表現のしかたとしてとりあげておく。

動詞「書く」「読む」の否定をあら形としてこの地域にあらわれる形の体系は次の通りである。

〔否定〕

（　）内は、後にあげる表のための符号とする。

カカン（ＡＮ）　カカヘン（ＡＨ）—カカヘナー（ＡＨｎ）

——　カケヘン（ＥＨ）—カケヘナー（ＥＨｎ）

〔カキャヘン（ｊＨ）〕

「読む」も同様である。

ヨマン（ＡＮ）　ヨマヘン（ＡＨ）—ヨマヘナー（ＡＨｎ）

——　ヨメヘン（ＥＨ）—ヨメヘナー（ＥＨｎ）

〔不可能〕

Ａ　カカレン　（ＡｅＮ）—カカレラン　（ＡｅａＮ）

ＡＨ（カカ）　カカレヘン（ＡｅＨ）—カカレラヘン（ＡｅａＨ）

Ｅ（カケ）　カケン（ＥＮ）＜カケレン（ＥｅＮ）／カケレラン（ＥｅａＮ）

カケレラナー（Ｅａｎ）

ＥＨ　カケヘン（ＥＨ）＜カケレヘン（ＥｅＨ）／カケレラヘン（ＥａＨ）

〔カキャーセン（ｊ—ｓ）〕

〔カケレーヘン（Ｅｅ—Ｈ）〕—カケレレヘン（ＥｅｅＨ）

カケレラヘン（ＥａＨ）—カケレラヘン（ＥｅａＨ）

カケレラセン（Ｅｅａｓ）—カケリャセン（Ｅｊｓ）

カケーヘン（Ｅ—Ｈ）

カケレリャセン（Ｅｅｊｓ）

「読む」も全く同様である。

これを地点別に示せば次の通りである。

地点	否定	不可能
①佐用	AN EH	E—H AeH
②上月	AN	AeH E—H
③林野	AN	EeN E
④津山	AN	EeN EeN
⑤智頭	AN	EeN EeN
⑥中私都	AN	EeN EeN j—s
⑦鳥取	AN	EeN EeN Ejs EeN Eeas
⑧山崎	AN AH	EN EH
⑨波賀	EN EH	AeH EN E—H
⑩引原	EN EH	EN EeH E—H
⑪道谷	AN AH	EN EaH
⑫若桜	AN AH	EN Ejs EaH Eeas
⑬生野	EH	AeH
⑭竹田	EH	EeH
⑮養父	EH	EeH
⑯八鹿	EH	EeH
⑰出石	EH	EeH
⑱豊岡	EH	EeH EeeH
⑲竹野	EH jH	EeH
⑳赤穂	AN EH	EH E—H
㉑日生	AN EH	Ae EN
㉒由良	EHn	Ean
㉓福良	E—H EH	E—H
㉔五色	EH	EeH
㉕三原	EH	E—H Ee—H
㉖一宮	EH	EeH
㉗北淡	EH	EeeH
㉘仮屋	EH	EeeH
㉙安乎	EH	EeH
㉚釜口	EH	EeH EeeH AeH

右の表の中、太線で区切った①—⑦の地区を㋑、⑧—⑫の地区を㋺、⑬—⑲を㋩、⑳㉑を㋥、㉒—㉚を㋭と、五つの地区に分ける。

㋑は、姫路から鳥取へ国鉄姫新線・因美線が通っている。

㋺は、神姫バスで姫路から鳥取へ出る道であり、山陰地方と阪神とを結ぶトラック輸送の道である。

㋩の、生野・竹田は、姫路から但馬へ通じる播但線であり、養父からは山陰本線につながっている。出石は国鉄は通っていないが、

豊岡からバスで三十分位のところである。

㈢は、瀬戸内側、兵庫県の海岸側で、岡山県に通じる道である。国鉄赤穂線が通っている。

㈱は、淡路島である。

否定表現では、

㋑はAN即ち、動詞ア段語尾に否定辞ンがつく地域（書）カカン、（飛）トバン、などとなる地域である。

㋺は、ANと、AH又はEHを使う地域、即ち、否定辞ンとともに、ヘンも使う地域となる。

㈥㈢㈱は、EHの地域で、動詞エ段語尾に否定辞ヘンをつける、即ち、可能動詞を使う地域である。

不可能表現では、

神戸市内では、EH、書ケヘン、書ケーヘンなどとなって、その間に、e、即ち、レという可能助動詞は入らない。それが、神戸から遠く離れた地域ほどレが入るようになる。

兵庫県の南端、福良。北端、豊岡には、レレなど、eeが入っている。受ケレレヘンとなるのである。

同じ五段活用動詞でも、多少の出入はある。例えば、⑪道谷では。「買う」は、カワン、カワヘンのほかに、コワンという否定があり、コエンという不可能がある。

又、同一地域で、否定にAN、EHがあり、不可能にEN、E—H、EeHがあっても、（書）カカン（否定）に対するものは、カカレヘン（不可能）であり、カケヘン（否定）に対するものは、カケン（不可能）、カケーヘン（不可能）である。

例えば、⑳赤穂で、否定と不可能とに、それぞれEHが入っているが、否定のカカヘンに対する不可能はカケヘンであり、否定のカケヘンに対する不可能はカケーヘンである。

このような対応関係を示せば次のようである。

	（否定）	（不可能）
一、EH	—	E—H、EaH、EeH EeeH、Ee—H
二、EHn	—	Ean
三、AN	—	EN、EeN
四、AH	—	EH

次に、一段動詞について述べる。

「受ける」を代表させて記すが、「起きる」の場合も、「受け」と、エ段からつくところが、「起き」とイ段からつくだけの違いである。他の下一段、上一段も同様である。

ただ、不可能表現の場合、「見る」は「見える」という可能動詞を使う場合があるので別に記す。

〔否定〕

ウケン（N）　　ウケラン（aN）

ウケレヘン(eH)—ウケレヘナ(eHn)

ウケヘン(H)—ウケーヘン(—H)〈ウケラヘン(aH)〔ウケヤヘン(YH)〕

(上一段活用に接続の「ヘン」が「ヒン」となる場合「ヒン」を「h」であらわす)

〔不可能〕

ウケレン(eN)—ウケレレン(eeN)

ウケレヘン(eH)—ウケレーヘン(e—H)—ウケレレヘン(eeH)

ウケリャセン(js)ウケレリャセン(ejs)

ウケレリャヘン(ejH)

ウケレラナー(ean)

ウケラレン(aeN)—ウケラレナー(aen)

ウケラレヘン(aeH)—ウケラレーヘン(ae—H)

ミエン(EN)

ミエヘン(EH)—ミエーヘン(E—H)—ミエレヘン(EeH)

ミラレヘン(aeH)—ミラレーヘン(ae—H)—ミラレレヘン(aeeH)

ミレン(eN)

ミレヘン(eH)—ミレレヘン(eeH)—ミレレラナ(eean)

ミレレヒン(eeh)

地点	否定	不可能
①佐用	—H	e—H aeH ae—H
②上月	—H	e—H
③林野	N	eN〔EN〕
④津山	N	eN eeN eeN
⑤智頭	N	eN
⑥中私都	N	eN
⑦鳥取	N	cN ejs aeN
⑧山崎	N	aeH
⑨波賀	—N H	aeN aeH
⑩引原	H	ae—H aeH
⑪道谷	aN H	eN
⑫若桜	N	eN ejs ejH
⑬生野	H	aeH
⑭竹田	hH	aeH eeH
⑮養父	eH	eeH
⑯八鹿	eH	eeH
⑰出石	eH	eeH
⑱豊岡	eH	eeH
⑲竹野	eH eh	eeH ceh ejH

地点	否定	不可能
⑳赤穂	H—h	aeH
㉑日生	HN	aeN eN
㉒由良	HeHn aN N	eaan 〔eean〕
㉓福良	—H〔EH〕	〔ae—H〕〔E—H〕 e—H aeH eeH
㉔五色	HeH	eeH
㉕三原	eH	eeH e—H
㉖一宮	eH	aeH
㉗北淡	eH	aeH
㉘仮屋	eH	〔aeeH〕 eH
㉙安乎	eH —H aN	aeH
㉚釜口	eH	eeH〔aeeH〕 aeH

表中、不可能表現の欄で〔　〕内に記したのは、「見る——見える」のみにあらわれる形である。

例えば、㉒由良で、〔eean〕があるが、それに対する否定の形を示していないのは、否定は、ミランとなって、同地で、「着る」も「キラン」、「集める」も「アツメラン」となるから、ミランを特にとりあげず、他の否定と同様にして、aNとして記しておいた。

㉓福良で、否定に〔EH〕とあるのは、「見エヘン」であるが、これは可能動詞「見える」に「ヘン」がついたのではなく、神戸市あたりで「見ヤヘン」に相当するもので、アクセントも、可能動詞の場合は、ミエヘンであるが、これはミエヘンである。

そして、これに対する不可能表現は、ミエーヘンである。そのほかに、ミラレーヘンがある。

この地には、まだ、ミレレヘンもあるが、これは、同地に、「起キレレヘン、受ケレレヘン」もあるから〔　〕はつけずにeeHと記した。

この表では、④の地区（①—⑦）の否定は、岡山県、鳥取県では全部、Nになっているのが目立つ。

不可能表現では、さきの五段活用動詞の場合と同様、但馬地区と、淡路地区とで、eeの形があることが目につく。受ケレレヘン、起キレレヘンという形である。

可能助動詞「られる」をつける地点が非常に少ないことがわかる。

「レレヘン」の形は、書カレヘン・書ケレヘンのレヘンが確立して、起キレルにもついたものと思う。

「刈れる」の否定は、カレレヘンであり、不可能は、カレレレヘン、又は、カレレーヘンとなる。レという同音があまり多くなると長音化することもある。

次に、「来る」と「居る」とについて記す。

「来る」の形と、それを使用する地点をあげる。

〔否定〕

コ　ン　林野、津山、智頭、中私都、鳥取、山崎、道谷、若桜

コーヘン　引原

コエヘン　上月、引原、養父

ケーヘン　養父、由良、福良、三原、仮屋、安乎、釜口

キーヘン　由良、仮屋

キエヘン　福良

クラヘン　道谷

〔不可能〕

コレン　林野、津山、智頭、中私都、鳥取、道谷、若桜

コレレン　林野、智頭

コレヘン　引原

コレーヘン　上月

コレレヘン　養父、福良

コレレーヘン　福良

コレリャヘン　若桜

コレリャセン　若桜

キレレヘン　安乎

コラレン　山崎

コラレヘン　山崎、引原、由良、三原、仮屋

コラレーヘン　福良

コラレレヘン　釜口

「居る」

〔否定〕

オラン　津山、智頭、山崎、若桜

オラヘン　山崎、引原、赤穂

オレヘン　上月、引原、養父、竹野、八鹿、出石、由良、福良、仮屋、安乎、釜口

オレヘナー　由良

〔不可能〕

オレン　津山、智頭、若桜

オレレン　津山、智頭

オレーヘン　上月、引原、赤穂、福良

オレレヘン　養父、八鹿、出石、由良、福良、釜口

オレレーヘン　竹野、福良

オレラナー　由良

オラレヘン　山崎、引原、仮屋、安乎

オラレーヘン　赤穂

否定「オレヘン」と不可能「オレレヘン」とが相対して、「オレル」という可能動詞に対して不可能を「オレレヘン」としたのである。「来る」の否定「クラヘン」に対する不可能は「クラレヘン」

があってもよさそうだが調査にはあらわれなかった。

「来る」「居る」の否定、不可能の何れの場合も、林野、津山、智頭、若桜、中私都、鳥取の岡山、鳥取両県に入る地点は一致していることが多く。

養父、竹野などの但馬地区と、由良、福良、仮屋などの淡路地区とが、それぞれ一致していることが多い。

岡山、鳥取両県のこれらの地点は、兵庫県内の各地点と、それぞれの間隔が必ずしも接近しているとは言えない。

例えば、山崎と、養父との間隔と、津山と鳥取との間隔など、距離の遠近によることなく、先に分けたように、㋑㋺㋩㋥㋭のそれぞれの地区によって分れているようである。

しかし、但馬地区と、淡路地区とが何れの場合も似通っているのは何故か。

北の但馬と、南の淡路とに共通した形の代表とみられる「レレヘン」の形は、和歌山県伊都郡にもあるとのことである。（註4）

こうなると、この形は近畿周辺地域の特徴とみることができようか。

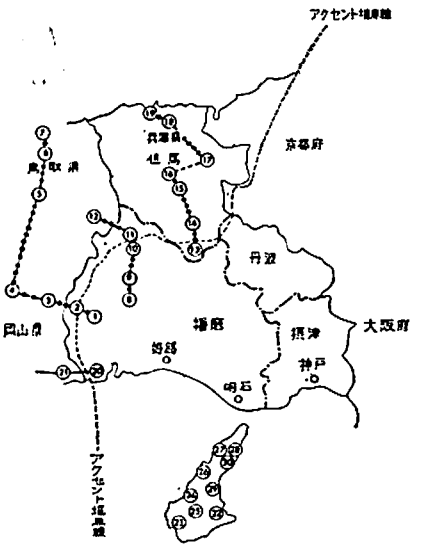
「レレヘン」の成立は、先にも記しような簡単なものと思われるが、簡単な成立過程だけに、他の地点にもあるのではないかと思われながら、神戸市のように「ヘン」使用地域にさえもあらわれることはないのはどういう理由によるのだろうか。

近畿周辺地域にばかり同じ形がおこるのは何故だろうか、ここにも方言文法の問題があるだろう。

（註1）虫明吉治郎著「岡山県のアクセント」ほか。

（註2）拙稿「兵庫県方言研究の概観」（甲南女子短期大学論叢第五号）

（註3）国語学辞典「近畿地方の方言」の項

（註4）（近畿方言の総合的研究）「兵庫県方言」五二二ページ「和歌山県方言」四〇二ページ

（図）